

◆東京映画祭についての質問

空港の話は終わりました、今度は、東京都の魅力をアピールするという意味で、来週十七日に開催されます東京国際映画祭について質問をさせていただきたいと思います。

この映画祭なんですが、世界十二大映画祭というんですか、その一つである本映画祭なんですが、どんなコンセプトを持って、どの程度の規模でこれまで行われてきたんでしょうか。

○小島観光部長 東京国際映画祭は、映像産業の発展、国際交流の推進及び地域振興に寄与することを目的に開催されるアジア最大の国際映画祭でありまして、国内外の映画関係者が集い、映画ファンが楽しみながら参加できるものとして実施されております。

今回、コンペティション部門には、昨年を上回る八十一の国と地域から七百四十三作品が出品されており、この中から、最高賞の東京サクラグランプリに都知事賞が授与されます。

なお、来場者数は、前回約十二万人となっております。

○田中委員 今、概要を説明してもらって、十二万というのが多いのか少ないのかというのでピンと来ないと思いますので、調べてみますと、いわゆる有名なベルリン映画祭は四十万人ですね。それから、さらに後発によく話題として上がります釜山の映画祭は十九万人、後発でありながら抜かれてしまっているということで、十二万人という数がまだまだ少ない、もしくはこれから数をふやしていかなきゃならないということだと思っております。その例を挙げましたが、これは、一方で東京だけの問題でもなくて、近年の社会経済の悪化に伴ってどの国も苦戦をしているというのも、調べてよくわかりました。

そういう中で、国際映画祭として我が東京国際映画祭は、目標としては、カンヌやベネチアに並ぶ三大映画祭を目指すということも書かれておりましたが、どのような取り組みによってこれからその発展を目指していくのか。また、どうしても、こういうのは自国の自己満足に陥りがちであったり、もしくは世界の評価から見ると低かったりするので、以前の質疑の中で、世界の評価を調べるという答弁もありましたので、それも踏まえて、どのような特徴を持っているのか、お聞かせください。

○小島観光部長 アジアを代表する映画祭として、韓国、中国からイスラエルまで幅広くアジアの作品を集めたアジアの風部門、日本映画の多様性をキーワードに作品を集めた日本映画・ある視点部門、また広く世界で話題になった作品や有名監督の新作などを集めたWORLD・CINEMA部門など、特色あるプログラムを盛り込んでおります。

また、昨年からは、地球環境を考える映画祭として、自然と人間との共生をテーマといたしました部門を設置するとともに、ペットボトルのリサイクルによるグリーンカーペットの使用やグリーン電力の使用等にも取り組んでおります。

これらの取り組みに対し、海外の国際映画祭の関係者から、グリーンカーペットになったのは斬新でいいアイデアです、日本のためにも世界のためにもよい映画祭になったと思いますといった多くの高い評価をいただいております。

○田中委員 グリーンカーペットというのは、私もこの案内をもらって初めて知ったんですが、評価は高いというものの、グリーンカーペット、まだまだ知名度が低いというか、知っている人が少ないんじゃないかというのも率直な感想でありまして、世界の評価は今、割と高いようでありますから、環境とセットで、ぜひしっかりと広報、もしくは周知をしていただきたいと思います。

例えば、映画の「おくりびと」、皆さんもご存じかと思うんですけど、これはアカデミー賞を受賞して、今、日本の映画や映像は低いといわれていたときに、まだまだ海外でも高い評価を受けられる、また、映画産業、邦画も、これから世界に誇れるコンテンツの一つとなるともいわれております。

この「おくりびと」は、制作するに当たっては、ロケ地の地域が積極的に受け入れを行って撮影に協力するなど、地元の支援、また活性化、観光支援につながったということも聞きました。

都では、国際映画祭のみならず、同時に観光の視点では、東京フィルムコミッション事業を産業労働局の観光部へ移管して、そこまで産業として育てていこうということで、今、取り組んでいるということをお聞きしております。

この東京における映像制作の受け入れというものをどのように考えて、またロケ地の支援にはどのように取り組んでいるのか、お聞きします。

○小島観光部長 映像作品によりロケ地となった地域の魅力が国内外へ発信され、地域のPRにつながることから、都では、平成十三年に東京ロケーションボックスを設置し、年間二千件以上の相談を受けております。

また、地域フィルムコミッション設立の支援を行うなど、都内における円滑なロケ撮影の環境づくりを行い、観光及び地域振興に努めているところでございます。

○田中委員 今の質問で、東京都の映画や映像に対する取り組みというのは少しわかってきましたが、しかし、来週に開かれる国際映画祭に話を戻しますと、現場の声を聞きますと、前からもずっといわれて、議事録を見ますと、なかなか出口やその目的が定まらない、見えないということがいわれております。東京国際映画祭でなくて、国際映画祭というものの自体は、見本市としての機能が大きなビジネスとしては取り上げられまして、出展すれば世界の人が見てくれるチャンスが生まれ、さらには、最優秀のグランプリをとれば、「おくりびと」のときもそうでありましたが、国内外にも発信されて大きな収益が上がると。

しかしながら、じゃ、東京のこの見本市としての機能はどうかといえば、昨年、カンヌが、これは業界向けというのも大きいんですが、二万五千人集めているにもかかわらず、東京はまだ四千人という現状があります。

さらに、先ほど話させてもらいましたが、映画を産業として見れば、これは大変厳しい現状でありまして、現状は、ほとんど大手のひとり勝ちであります。データを挙げれば、社団法人の日本映画製作者連盟という、映画をつくっている人たちの連盟の調査によりますと、昨年の平成二十年は、興行収入が十億円以上の邦画は二十八本あったそうではありますが、うち、東宝が二十二本と、ほとんどを占めてしまっていて、別に東宝さんが悪いとかいいとかいっているわけではないんですが、今は大手が映画を配給もしくは制作する形になってしまって、独立系や小さな制作会社というのは、大変に生き残るのにも

難しい。実際に渋谷の単館映画、私もよく行きますが、今、廃業もしくは廃館が進んでおりまして、それが現実をあらわしております。だからこそ、先ほどいいましたこの映画祭という位置づけを産業の育成支援という視点から考え直していく必要があると思っております。

先ほどの話では、確かに地球環境を考える映画祭を目指すというのも確かにいいことですが、一番最初の映画祭の目的でもあったように、映画ファンが楽しみ参加できる、つまり映画産業の発展のための映画祭という、その一番最初のコンセプトをもう一度思い直して、そのために何をすべきかということを考えるべきであると考えております。それについてはいかがでしょうか。

○小島観光部長 東京では、映像を通じまして東京の魅力を世界に発信して外客を誘致しようという観点、また国際交流の推進、地域振興に寄与するという観点から、引き続き映画を通じました観光及び地域振興、こういったところに努めてまいりたいというふうに考えているところでございます。

○田中委員 ちょっと今、答弁になっていなかったんですが、もともとあった産業育成の支援という視点をこの映画祭に持つのか持たないのかと。それについてお金を使っていくならば、私は意義あることだと思うんですが、今のままですと、どうしても、二十二回もやっていますから、長年やっているというのと、もしくは六本木でやっているというだけでありまして、目指す国際という冠がつくほどの映画祭、もしくは発信力を持つ映画祭としての意義は、毎年逆に薄れているんじゃないかという質問でありましたが、もう一度お願いします。

○小島観光部長 映画祭は観光振興にもつながりますし、また、映画産業として、そういった位置づけの観点からも、映像、映画の今後の振興に取り組んでいくというところで考えていきたいというふうに考えております。

○田中委員 ぜひ映画産業の振興という点に取り組んでいただきたいのと、これに関してことは東京都から三千万円の補助が、もしくは支援が出ているということでありまして、これは最高賞の東京サクラグランプリに、都知事賞ということで、これに大きく使っているということではありますが、この都知事賞のサクラグランプリをとると、世界じゅうに配信されて大変チャンスとして大きなきっかけになれるというぐらいの名誉ある賞にぜひしていきたいと思っておりますし、私も、来週ありますので、自分の目で見て、またこの委員会でも、その報告と一緒に、皆さんと映画産業を盛り上げるために努力していきたいと思っております。